

複数言語環境で子育てをする親の言語と教育に関する意識と選択

—タイにおける面接調査から—

石井恵理子 (東京女子大学)

1. 研究の目的

多文化の子どもの支援には、子どもを支える親への支援が重要であるが、日本語社会ではことばの壁等により親が孤立状態であることも多い。移民政策により多文化状況が拡大し対応が進んでいるカナダについての調査から、そのような制度や支援にたどり着くための多様な接続の様相を分析し、情報入手の段階から他者への働きかけへ進むことが活動や接続の拡大・変容のきっかけとなることが見えた(秋山、石井 2017a、秋山、石井 2017b)。本研究は、カナダ調査を踏まえ、異なる社会制度や子育て文化、家族関係、教育の選択肢等の異なるタイにおける調査について、親が子育てにおいて決断や選択をするにあたりどのような要因が影響するか、家庭の特性や能力、リソース、多言語環境での位置取りや他者との関わりによってどう変化していくかを探る。

2. 研究方法

本研究は、2017年3月にタイ・バンコク市内で行ったタイ在住の複数言語環境で子育てをしている親を対象としたインタビュー調査で得たデータに基づくものである。バンコクで活動している複数言語環境の子どもの教育に関する研究会の主催者のネットワークを中心に、これまでの参加者等タイで学齢期の子を育てている親に協力を募り、8名の調査協力者を得た。調査者と調査協力者との1対1の面接形式で、調査者以外には話を聞かれることのない環境で、音声録音と手書きメモによりインタビュー内容を記録した。調査の前後に個人情報保護、調査協力に関する許諾の権利、プライバシー保護についての説明と確認を行った。

協力者は8名の母親で、調査時の居住地はバンコク市内7名、地方在住1名(H)である。調査時間は1人につき1時間から2.5時間である。得られたデータを文字し、親の情報リソース、子どもの教育環境等の整備に関する意識と行動に焦点を中心に、分析した。

表1. 調査協力者および家族の属性

協力者	母年齢	父年齢	在タイ年	母父出身	母言語	父言語	夫婦間	母子間	父子間	子供間	子年齢	子言語
A	30代	40代	8年	日・タイ	日,中	タイ,中	中	日	タイ	日	7(小1)	日,T
								日	タイ	日	2	日
B	50代	50代	18年	日・タイ	日,タイ,英	日,英,タイ	日	日	日,タイ		16(高1)	日,タイ,英
C	50代	50代	20年	日・タイ	日,タイ	中,タイ,日	日	日	タイ,日→タイ	タイ	19(大2)	日,タイ,英
									タイ,日	タイ	17(高2)	日,タイ,英
D	40代	40代	①7年 ②1年	日・日	日,タイ	日	日	日	日	日	18(高3)	日,英,タイ
							日	日	日	日	16(高1)	日,英,タイ
E	60代	60代	22年	日・英	日,英,タイ	英,タイ	英	日	英		15(高1)	英,日
F	40代	40代	9年	日・タイ	日,タイ,英	英,タイ,日	日,タイ	日	日→タイ	日,タイ	6(幼)	日,タイ,英
								日	日→タイ	日,タイ	3	日,タイ
G	40代		6年	日・タイ	日,タイ,西	タイ,英	英,タイ	日	タイ		4(幼)	日,タイ,英,中
H	40代	40代	17年	日・タイ	日,英,タイ	タイ,日,英	日	日	タイ	日	11(小5)	日,タイ
									タイ	日	9(小3)	日,タイ

3. 分析結果と考察

タイ、特にバンコクでの学校選択は選択肢が極めて多い。幼稚園の段階から経営の背景(タイ、中国系、日本、インターナショナル等)や保育者の言語文化的背景、教育言語のバリエーションが多く、学校文化や教育システムもそれと連動して異なる。どの言語で学習を積み上げてきたかが次の教育段階の選択肢に大きく影響するため、学校選択は先の見通しが重要となる。

学校言語が家庭言語と異なる場合、教師との連絡・相談のためには親の言語能力が重要である。子どもの学習状況の相談や、配慮や対応について、交渉によって個別の対応が得られた E のケースのように、交渉によって規則外の対応がありうるタイ文化社会において、複数言語に対応できる親は教師や学校の理解や支援が得られるよう働きかけができる。あるいは、周囲に日本語日本文化を共有できる相手のいないタイの地方に住む H の例では、子どもについての相談はタイ語で教員にし、タイ語では十分伝えられない母自身のメンタルに関する相談については学校の教会のシスターと神父に英語で相談することで、母自身の悩みを受け止めてもらうことで、多文化での子育ての悩みやプレッシャーを軽減し、子どもの課題と向き合う余裕を持つことができると話す。

長期・永住家庭の場合、多くの親が複数言語家庭で育ったり、若い頃に海外生活や勤務・留学をした複数言語話者である。多言語社会で生きてきたモデルとなる一方、乗り越えられた自分を規準に子どもの困難さを共有しない、という不満を家族が持つケースも複数見られた。

また、A は夫がタイ人の永住家庭であるが、住居は駐在日本人の集住地域である。子育てに際しての選択肢等は周囲とは異なるところが多いが、母は子どもの日本語力の伸長を重視し、駐在家庭の子どもたちのサッカー教室に息子を入れ、新しい日本語の語彙を学ぶ機会としている。親同士のつながりもでき、日本の情報を得るだけでなくタイ情報を提供する役割を得て、家族同士での交流が進んだことで、子どもの日本語接触機会となっている。

それぞれの利点や問題点の理解と同時に、関係性の転換や別の視点からの検討によって、違う効果が生じることも見えてきた。

付記

本発表は、科学研究助成事業(基盤 B)「複数言語背景の子どもの日本語支援を支えるネットワーキングに関する実践的研究」(課題番号:16H03437, 研究代表:石井恵理子)の一部である。

調査にご協力くださった皆様に感謝いたします。

【引用文献】

- 秋山幸・石井恵理子 (2017) a 「カナダで育つ日本語背景の幼児の親が抱える課題解決に向けたネットワーキング」『子どもの日本語教育研究会第2回大会 大会発表抄録』 pp.5-6
秋山幸・石井恵理子 (2017) b 「地域の拠点と人を横断する子育てネットワーキングにおける「学習」の実践—カナダの日本語背景の子どもを持つ母親の聞き取り調査から—」『2017 異文化間教育学会第38回大会発表抄録』 pp.192-193